

『社会保障法』

(K.K・その他)

がん拠点病院に常勤する社会保険労務士として、がん患者さんの仕事と治療の両立支援に従事しているが、患者さんの苦痛には身体と心と「お金」がある。「お金」の痛みに対しては、わが国には様々な公的保障制度があり、患者さんが救われる保険給付は多くあるのだが、患者さんは自分にどのような受給権があるかよく承知していないのが常である。本書のはしがきにあるように、社会保障法は、私たちが生きていくことと密接に関係する法律であり、健康なうちに(できれば若いときから)基本的なことを知っていると、人生の困難に直面した際の安心材料になるはずである。

本書は、基本的に疾病、障害(年金)、労災、離職、介護、福祉といったライフイベントに沿って丁寧に解説されている。分量も適切で、箸休めとして時折挿入されている Column も良い。最終章「生活保護」の前には、社会保険と福祉のはざまでさまよう人を救うための「第二のセーフティネット」制度についてもきちんと解説されている。自助(社会保険)から公助(福祉)の流れが俯瞰できるため、本書は法学的アプローチを学ぶ大学生のためのテキストにとどまらず、人生の様々な保険事故に遭遇される前の万人にお勧めしたい。

『法学教室』2019年12月号(No.471)掲載「Reader's Voice」より